

VOLUME 7

# WOMEN IN ART

女性的な記号への  
多層的な視線

By Yukako Yamashita

## SARAH SLAPPEY

サラ・スラッピー

マニエリスム絵画を彷彿とさせるふくよかな手足とめらかな指、それを取り巻きリボンやパール。一見すると、いわゆる女性らしさとかわいらしさを感じさせるサラ・スラッピーの作品。しかしよく見ると、リボンはボビーピンや針で手に縫いつけられ、そこから流血している。フェミニニティのなかに不気味さが混在するスラッピーの作品は、今年9月に開催された世界最大のアートフェア、アート・バーゼルのサテライト会場でも展示され、欧米のコレクターや美術館を中心に注目を集めている。

「女性らしさとそれを感じることによる葛藤」。彼女の作品からは、女性ならおそらく誰でも一度は自覚したことがあるだろう感覚が伝わり、共感を生む。私たちはいつの間にか「自分の体」を「女性の体」として見るようになり、「女性らしさ」を語る術を得たのだろうか。

アメリカ南部で、ジェンダーの役割が明確に定まった環境で生まれ育ったスラッピー。3姉妹の次女として生まれた彼女は、ガーリーな少女だったと話す。一方で、父にミミズを買ってもらって遊ぶなど、幼少期からかわいいものと気味の悪いものの両面性に惹かれていたという。

彼女の作品に登場するチェック柄、ボビーピンなど女性らしさを表す記号も、家庭における女性の役割が明確なアメリカ南部を

スケッチの段階で、すでにキャンバスに塗りたい色が具体的に見えているという。



上:「Girl Talk」(2021) 油彩、アクリル絵具、カンヴァス 182.88cm×157.48cm  
下:イーストリバー越しにマンハッタンを望むダンボにあるスタジオにて。毎日スタジオと自宅を往復する彼女にとって、創作行為はきわめてパーソナルなもの。自身に集中することをいかに維持し続けられるかに心を砕いている。  
右ページ上:「Red Gingham and Pins」(2021) 油彩、アクリル絵具、カンヴァス 154.94cm×139.70cm 右ページ下:「Sacrificial Bow (Green) Study」(2021) アクリル絵具、油彩、紙 40.64cm×35.56cm

PHOTOS: NICHOLAS CALCOTT.  
ARTWORKS: COURTESY OF THE ARTIST AND SARGENT'S DAUGHTERS.  
COORDINATION: YUMI KOMATSU



象徴するものだという。裁縫のプロだった母を持ち、自身は17歳までバレエをしていたことから、いつも身の回りにボビーピンがあったと話す。一方で、そうしたパーソナルな思い出を象徴する裁縫針やピンはタイトな服と結びついており、それにより自由が利かなかったり、女性の体を抑圧し、完璧なペルソナを作るものとして拷問の道具にもなり得る。

「描いているときは、痛みを感じつつ楽しんでいきます。絵のイメージの要約に等しく、まさに喜びと苦痛です」。そう語る彼女に転機が訪れたのは、大学時代にジェンダー論を学んだときだった。きわめて保守的な家庭に育った彼女は、そこで初めて社会構造を理解し、客観的に自分が育った環境を見ることができたのだ。そして、それによってフェミニニティや女性の体について言語化し、表現できるようになった。それはまさに「女性であること」と「女性らしさ」に対して葛藤する思いが生じた瞬間だったと語る。

「スーザン・ソクタグを知り、ジェンダー論でやるせなさを思い



く、体やセクシュアリティを称えることでもあります。洋服にしても、個人的に女性らしさを楽しむことは大好きです」。だが女性らしさ＝男性にとって魅力的である、という価値観には抵抗があるという。彼女は今年ニューヨークで開催した個展のタイトルを「Self Care」と名づけた。その意図を尋ねると、美容業界では整形やボトックス、高価なスキンケアなどは、女性たちがより輝くためのケアだとうたわれるが、実際は他者のために女性を魅力的に見せるためという側面も感じたからだという。

私たちは社会のなかで他者から求められるイメージと、素の自分自身の間で葛藤している。彼女が描く、美のなかにひそむグロテスク。人は一義的な存在ではない。相反するものはごまに魅力を感じるこそ人間性なのであり、そこに個人の魅力が宿るのではないだろうか。■

**サラ・スラッピー**:1984年、アメリカ・サウスカロライナ州生まれ。2016年、ハンターカレッジで修士号を取得。マリア・ベルンハイム・ギャラリー(チューリヒ)やサーjent・ドーターズ(ニューヨーク)で個展を開催。若手ながらジュネーブ近現代美術館に作品が収蔵されるなど、アートマーケットからの注目度が急上昇中。

**山下有佳子**:1988年、東京生まれ。サザビーズロンドンを経て、サザビーズジャパンにて戦後日本美術の取り扱い拡大などに携わる。2017年より、アートギャラリー「THE CLUB」のマネージングディレクターを務める。2020年、京都芸術大学(旧京都造形芸術大学)の客員教授に就任。



上:アトリエの一角。制作に必要なものだけがコンパクトにまとめられている。右:カラーブロッキングの境目が際立つように、作品にペイントする前にマスキングテープを貼っている。



知ってもなお、フェミニニティというものは素晴らしいものである、とも

も思っています。葛藤はありますが、その葛藤こそ探求に値するものなので、私は絵を描いているのでしょう。私にとってフェミニニティとは、知らず知らずのうちに引き継がれてきた文化的な規範や欲求でしょうか。それに決して悪いことばかりではなく、